迷子の遊園地　【再生】

作・藤田ヒロシ

暗く狭い部屋。

中央に二人掛けのソファー。向かい合うようにテレビ。壁には無数の写真が貼られている。

ソファーに腰掛けた男。その冷めた目がテレビの明かりに照らされる。

テレビから「あえぎ声」が聞こえ、男は「肉」を貪り食っている。テレビの中の馬鹿女のボルテージが上がると、男の食べる速度も上がる。やがて、馬鹿女は絶頂へと上り詰め、男は完食する。

男はティッシュで口を拭い煙草に火をつけビールを開ける。テレビからは馬鹿女の馬鹿な話が聞こえてくる。

馬鹿女　夢？いっぱい、いっぱいの人にミナのこと見て欲しいし、ミナもいっぱい、いっぱいの人、癒してあげたい。だからもっといっぱい、いっぱいお仕事して、いっぱい、いっぱい…いっぱい、いっぱい…ミナも癒されたい。

男がテレビを消す。テープを数本の手に去ってゆく。

ミナが現れる。

ミナ　夢ってお金で買えるのですか？答えは…イエス。お金で買える夢しか見ないことにしたあの日から、答えはイエス。

ミナ、ソファーに座り「クスリ」を飲む。

ミナ　私のキャッチコピーは「癒し系痴女」ある雑誌のインタビューで私自身が付けたことになっているが、そんな記憶はない。所詮は「作り物」。この世の全てがどうかは知らないけれど、少なくとも私のまわりはそうだと言い切れる。あの歪んだ顔も、高鳴る声も、経験数５０人のプロフィールも貼りつけただけのフェイクに過ぎない。でも、私は誰も騙してはないない。皆騙された振りをしているだけだ。フェイクを破り去り、中身を覗いたところで癒されないことを、皆知っている。

ソファーに崩れてゆくミナ。

ミナ　いっぱい、いっぱいのウソと私はいます。

闇の中、次の詩が聞こえてくる。

数字と記号の詩に埋もれた　記憶

靴音と溜息の音楽に消えた　夢

「ユメ」？なあにそれ？食べられるの？美味しいの？甘いの？酸っぱいの？辛いの？苦いの？

冒険と逃避のオセロで遊ばれた　自我

唇と月のダンスにくれた　愛
「アイ」？なかにそれ？どんな形？まあるいの？四角いの？とげとげしてるの？つるつるしてるの？凸凹しているの？
あの日から始まっているのです
呼吸をする度　瞬きをする度
あの日から壊れ続けているのです
肌にふれる度　歩みを進める度
壊れ続けているのです　コワレツヅケテキタノデス

喪服を着たサチ。テレビがその馬鹿笑いの表情を映し出す。ピザをむさぼり喰っている。やがてその手が止まる。一瞬その表情に影が落ちる。

サチ　ビール！（再び笑いだす）

同じく喪服のマコトがビールを持ってくる。

マコト　サチ？
サチ　（笑っている）
マコト　サチ？
サチ　（笑っている）
マコト　サチ！

マコト、テレビを切りサチを睨むように見つめる。

マコト　時間だよ。
サチ　（ピザを手に取り）タバスコを始めて輸入したのってアントニオ猪木って、知ってた？
マコト　行かなくていいの？
サチ　当時は全然売れなかったって、知ってた？
マコト　待ってるよ。
サチ　彼が販売権を手放したらブレイクしたって、知ってた？
マコト　最後なんだよ。
サチ　イタリアじゃタバスコじゃなくて唐辛子をかけるって、知ってた？

マコト　サチが見送ってあげないと。

サチ　ピサって聞いて日本人が思い描くそれは、アメリカンスタイルって、知ってた？

マコト　気持ちわかるけど、受け止めないと。

サチ　アメリカっていつもそう。豚肉で作るハンブルグステーキがアメリカにわたって牛肉に姿を変えて、挙句の果てにパンに挟まれて、世界を征服。見てみろよ、窓の外。アメリカンナイズされたその景色。いっそのこと、あの日に５１番目の州になってしまえばよかったんだよ。そうなっていれば、いい年して駅前留学を余儀なくされるサラリーマンの苦労も、カッコだけで意味のわからない横文字を並べた歌も、それを聴かされて自国の文化の空っぽさに凹むこともなかった。

マコト　サチ？

サチ　俺もお前もアメリカ人だったのにな。そうすれば、もっと自由に歩けたかもしれないのにな。

サチ、テレビをつける。「馬鹿笑い」が聞こえてくる。

マコト　アメリカって本当に自由？

サチ　（かすかな声で）行かない。

マコト　えっ？

サチ　私、行かないから。マコト、行っていいよ。

マコト　…ダメ。

サチ　どうして？

マコト　最後のお別れなんだよ。アイツのこと慕っていた…愛していた人たちがお別れをするのよ。サチ、いないといけないよ。サチが一番…。

サチ　違うよ。おととしの夜、アイツの死んだ日、死んだ時。私はテレビを見てた。アイツの嫌いな歌番組を、シーツにくるまって、名字を知らない男とアイツと昔よく行ったホテルでね。

マコト　ウソ…。

サチ、マコトに何かを投げつける。マコト、それを拾う。それはラブホテルのライター。

サチ　マコト。彼と上手くいってないんでしょ？今度それをさりげなく使ってみたら？男の嫉妬って、可愛いよ。

マコト　…。

サチ　真面目で、従順。賢い犬コロみたいなマコトのそのイメージ悪くないけど、飽きられちゃうよ。

マコト　刺激を与えるため？

サチ　私は違う。恋愛なんて、始まりのその瞬間がピークで後は下がるだけ。私とアイツは…自分で言うのも笑えるけど…かなり激しかったじゃない？だから、下る勢いもあって、惰性の転がりも長くてね。ここまでコロコロ、コロコロ…って。

マコト　でも、最後なんだよ。

サチ　…いいじゃない。私が行かないと始まらないわけじゃないし。

マコト　…。

サチ　死んだらそれで終わり。別れも何も…もう終わってるじゃない。

マコト、サチの手を掴む。鋭い視線だ。

サチ　ウザイな。

マコト、サチの手を引っ張り上げる。サチ、力なく立ち上がる。

サチ　説明的に飛び出す字幕。ウザイ。「はい、ここ笑うとこ」って、ＡＤの合図みたいでさ。俺たちサクラなのかよ。ウザイよ。そう思いながらも、気がつけば字幕追ってる俺、ウザイよ。笑ってる俺、ウザイよ。一緒に笑っているお前、ウザイよ。

マコト、サチを連れていく。

サチ　ウザイよね。勝手に死んだアンタも、ウザイんだよ。

マコトに手をひかれ出てゆくサチ。テレビから笑い声が響いてくる。と、突然それが止む。

ソファーの後ろから「手」が現れる。リモコンが握られている。男が姿を現す。

男、残っているピザの臭いをかぐ…軽くひとかじりして、吐き出す。ピザをごみ箱に捨てる。ついでにビールも。

男、部屋をうろうろと歩き始め、何やら考え込んでいる。おもむろにテレビをつけあらゆる角度で覗き込む。そして、テレビをソファーに置き、自分はその隣に座る。

男、ビデオを再生する、「ミナ」の姿が浮かび、嬉しそうにほほ笑む。

男　おはよう。今日は何の日か知っているよね？えっ、違うよ。知っているくせに、いつもそうやって…。そう、そうだよ。あの日から始まったんだよ。あの日から、僕たちは…。今日は何をしよう。遊園地？映画？買い物？それとも、何の目的もなくただ２人で…。僕はなんでもいいよ。ミナと一緒ならば

…そんなこと言ったら、何も決められないじゃないか。何がしたい？何をしてほしい？ミナは何が欲しいんだい？

テレビから声がする

ミナ　いっぱい、いっぱいの人にミナのこと見て欲しいし、ミナもいっぱい、いっぱいの人、癒してあげたい。

男　「いっぱい」？僕、じゃないの？

ミナ　だから、もっといっぱい、いっぱいお仕事して。

男　そんなに働かなくていいよ。僕がいるじゃないか？お金なら僕があげるよ。そばにいてくれればいいんだ。僕だけを見てくれればいいんだ。

ミナ　いっぱい、いっぱい…いっぱい、いっぱい…ミナも癒されたい。

男　癒してあげるよ、さぁ、おいで。癒してあげる。ミナ、癒してあげる。

男、テレビを愛撫するかのように、撫で、抱きしめ、元の位置におき、

男　さぁ、ミナ…癒されよう。

ミナが現れる。男の隣に座ると、シャツのボタンを外してゆく。男の目線はテレビに。

ミナ、男の上半身を裸にすると、寝かせまたがる。男、上半身を起こす。ミナ、男の首を絞める。男の顔に笑みがこぼれる。男、ミナの首を絞める。

男　癒してあげる…僕が癒してあげる。

ミナ　いっぱい、いっぱい？

男　もちろん。

ミナ　本当に？いっぱい、いっぱい？

男　そうだよ、いっぱい…。

ミナ　ミナ、いっぱい、いっぱい癒されたい。ミナ…いっぱい、イッパイ。

二人、闇に包まれ、テレビからノイズが響く。

携帯がなる。留守電の応答が聞こえる。発信音の後、車の急ブレーキ音、そしてクラッシュ音。

テレビにサチの顔が照らされる。

テレビからは“くだらない歌”が流れている。サチはシーツにくるまってリズムを刻みながら、スパゲッティーを食べている。

サチ　外れ。腰が弱い、へロへロ。お手軽、便利、早いだけが取り柄です、みたいな…最悪。最近はやたらと細いし、食べ応えがない。外見だけは決め込んでうまいぜって…最低。満たしてはくれない。空っぽ。

たわいもないラブソングが流れる。

サチ　飽き飽きよ、ウンザリ。

携帯が鳴る。画面を見るが、出ようとはしないサチ。

サチ　ただ今、へロへロで電話に出ることは出来ません。

ソファーに崩れ落ちてゆく。

サチ　ピーっと鳴ったら私を忘れてください。（間）ピー。

マコトが現れる。その手にはお寿司。

マコト　サチ。食べようか？

眠りについているサチ。

マコト　サチ？

自分の分の寿司をテーブルに、マコトの分を冷蔵庫に。

マコト　「アイツは自由に生きました。アイツは縛られ続ける何十年より、自由な二十二年を選んだのです」

マコト、寿司を一貫口に入れる。

マコト　哀しいけど…旨い。

もう一貫いく。

マコト　この玉子、桜エビの出汁を使っている。しゃりは少し甘めでかすかに昆布が香る。

もう一貫いく。

マコト　このかっぱ巻き、海苔の香りもさることながら、胡瓜の自然の香りが広がる。

もう一貫いく。

マコト　もったいないくらい、旨い。アイツの両親はどんな味を感じるのだろう？私は、悔しいくらいに旨いと感じる。こんな夜でも…感じる。

サチ、いつの間にか目を開けている。

サチ　私の分は？

マコト　冷蔵庫よ。持ってこようか？

サチ　（うなずく）

マコト、立ち上がる。

サチ　やっぱり、いらない。

マコト　…。

サチ　何で二人とも「別れよう」って言わなかったんだろうね。本音はいつもそこにあったのに…性欲でごまかされたのかな？

マコト　…。

サチ　あいつ、乗っかられるのが好きで、私、乗っかるのが好きだから、そういう意味ではベストだった。

サチ、結局お寿司を食べ始める。

マコト、お茶を持ってくる。

マコトの携帯がなる。二人の視線が合う。マコト、慌てて形態をとり、部屋の隅へ。小声で何やら話している。

サチ　「ずっと私の中に生きている」…よく聞く言葉だけど、私の中にアイツは生き続けないだろう。一瞬…そう、ほんの一瞬のキラメキの為に二人は存在した。私はそう思う。だから、もうアイツの欠片には用はない。

サチ、壁に貼られた写真を次々と剥がしてゆく。

電話を終えたマコトがその姿を眺めている。サチは次第に荒々しく剥がし始める。そして、最後の一枚になった時、その手を止める。

サチ、手に持った写真をゴミ箱にためらいなく捨てる。

サチ　彼…でしょ？

マコト　え？

サチ　電話。

マコト　…うん。

サチ　「逢いたい」って？

マコト　別に…。

サチ　行きなよ。

マコト　ホント、そうじゃないから。それに、気分でもないし。

サチ　でも、行きなよ。逢いたくなくても行きなよ。向こうがそうおもっているな

ら、行きなよ。

マコト　…。

サチ　行きなさいよ！

マコト　…サチ？

サチ　「また今度」…嫌な言葉。嫌いな言葉。何気なく口にしているんだろうけど、それが余計に寂しい思いにさせているんだ。「また今度」「また今度」…大切なのはその瞬間。今なのに、なぜ？「また今度」今この瞬間だから意味があるのに「また今度」三日月が青く光る夜なのに「また今度」風がべっとりまとわりつく海なのに「また今度」私がまた一つ壊れたのに「また今度」俺がまた一つ壊したのに「また今度」二人がなだらかに破滅へと転がり続けているのに「また今度」「また今度」「また今度」…。口にする度、扉は閉じられ、そして開けられる。次を…明日を…不確定なものを信じようとしたから、幾つもの嘘が残された。幾つもの「また今度」それは今から逃げ出すためのものでしかない。

サチ、最後の一枚を外す。

サチ　行きなよ。待っているんでしょ？

マコト　…。

サチ　喧嘩でもした？いいじゃないそんなこと。昨日のことなんて、そんな昔、忘れなよ。

マコト　いいの、ホントに。

サチ、鋭い視線でマコトを見る。しばらくして、にっこり微笑む。

サチ　知らなかった。もう十年以上も「友達」やっているのに知らなかった。

マコト　何が？

サチ　でも、わかった。なんで十年も友達やってこれたかわかった。

マコト　何よ。

サチ、勢いよくマコトの寸前に立つ。

サチ　私は今、私を見ている。マコトは今、マコトを見ている。お互いの瞳に映り込んだ自分。今、私たちは一番近くて遠い存在を見つめている。そうなんだよね。

と、にっこり微笑む。

マコト　…そうだよ。ずっと、あの日からそうだよ。

サチ　今の私は、哀しい顔している？

マコト　哀しいの？
サチ　わからない。すっきりもしてる。
マコト　突然降り出す雨には、ただただ、ジタバタするけど…。
サチ　天気予報は大外れ。明日はどうかな？
マコト　さぁ、誰にも本当はわからない。当たっても、外れても明日は、明日。
サチ　でも、なぜ知りたがる？
マコト　不安だからよ。何も掴むものがないのは不安だから。
サチ　スリル、あるのに。
マコト　同じ事よ。
サチ　同じじゃない。
マコト　同じ何だって。
サチ　不安なの？
マコト　不安でしょ？
サチ　明日の天気は？
マコト　晴れ。
サチ　本当に？
マコト　今は真実なんて、必要ない。
サチ　だね。
マコト　今は嘘でもいい。
サチ　だね。
マコト　本当は、嘘は嫌？
サチ　…。
マコト　本当は、嘘は嫌。
サチ　無理だよ。そんなこと望んだら、生きられないよ。私もマコトも。みんな、みんな。
マコト　そうね、生きられないね。
サチ　それもいいかもしれない。全部ぶちまけて、滅ぶのもいいかもしれない。きっと、気が楽だよ。

マコト　そうね、楽しいかも知れない。

サチ　楽だよ、きっと。信じられない苦しみも、わからない哀しみもない。

マコト　でも、隠せない。

サチ　だから、生きられない。

マコト　そうね。

サチ　そうなんだよ。

サチ、にっこり微笑んでゴミ箱から袋を出す。それを持って出てゆこうとするが出口で止まり、

サチ　きっと朝、起きれないから。

サチ、ゴミを捨てに行く。

サチが消えると、マコトは携帯を手にして電話をかける。が、出ないようだ。もう一度…やはりダメ。携帯を投げつけるマコト。

～暗転～

ミナ、手鏡を見つめている。

ミナ　鏡よ、鏡、鏡さん　この世で一番美しいモノは？

鑑よ、鏡、鏡さん　この世で一番優しいモノは？

鑑よ、鏡、鏡さん　この世で一番愛しいモノは？

鑑よ、鏡、鏡さん　この世で一番輝かしいモノは？

知っているのですか？　知っているのでしょ？

鑑よ、鏡、鏡さん　この世で一番哀しいことは？

ミナ、鏡を外す。

ミナ　今日の天気は？

太陽はかくれんぼ　でも泣くことはありませんでした？

昨日の天気は？

太陽はかくれんぼ　でもなくことはありませんでした？

明日の天気は？

太陽はかくれんぼ…いえ、誰にもわかりません

でもきっと

ええ、まぁ、そうでしょう

もう随分と長いようだね

ええ、まぁ、随分と。

停滞ですか？

いえ、次から次へと…そんな感じで。

辛いですね

ミナ　ええ、まぁ、辛いと言えばそうですが…それが選んでしまった道ですから

ミナ、クスリを飲もうと手にするが、止める。

ミナ　「誰もわかってくれない」と、馬鹿馬鹿しい嘆きを繰り返し、死にゆく。それもいいかも…。

ミナ、冷蔵庫からヨーグルトを持ち出す。それを食べながら、

ミナ　あの人…多分死んじゃったな。吹っ飛んだからね。派手に。でも何で、あんな所横切ろうとしたんだろう？すぐ近くに信号あるのに…死にたかったのかな？（間）目があった。その瞬間。笑っていた気がする。猛スピードの車に跳ねられ、宙を舞いながら…笑っていた。あの人。痛くなかったのかな？時間がゆっくり流れるって言うけど、痛みもゆっくり伝わるのかな？（間）それにしても、昨日の仕事はさいていだったな。

ヨーグルトを食べ終え、今度はゼリーを取り出す。

ミナ　あのタクシーの運転手。気付いていた。ルームミラー越しに、なめ回すように見ていた。間違いない。確信を持って聞いてきたんだ。「お客さん、お仕事帰りですか？夜遅くまで大変ですね」口元がにやりと歪んでいた。「運転手さんだってお仕事でしょ？」「確かにそうですね、お互い大変ですな」お互い…？アンタも嫌々やっているんだ。仕方なく、流れ着いたところにいるんだ。ひと仕事終える度、自分が削られてゆく…なら、癒してあげようか？「いっぱい、いっぱい、癒してあげる」（間）それにしても、昨日の仕事はさいていだったな。

ゼリーを潰してゆく。

ミナ　「いけるか、いけないか」ただそれだけ。テクニックは必要だよ。でも、くだらない理論はいらない。三十分。カメラを止めて説教して、アンタは満足だろう。ある意味「いった」んだろう。でも、それがどうした？思い描いた夢にはじかれて流れてきたんだろ？なのにプライド？本気でそんなこと思っているなら、終わってるよ。プライドあったら、とっくに辞めている…いや、やっていないね、こんな事。妥協の産物。そんなに熱くなることないじゃん。疲れるだけだよ、そんなの。

ゼリーを飲む。

ミナ　自分がいく。いかせる事とは違うんだ。

男、興奮した様子で現れる。息を荒げ、テープをデッキに入れ、リモコンを…と、手が止まる。次第に、呼吸が落ち着く。

ミナ　もう、疲れた。これ以上は無理よ。

男　予期はしていた。でも、覚悟は出来ていなかった。目の前の景色が瞬間に色を失い、音は消えて行った。

ミナ　あなたは誰も愛せない。

男　それは、僕が愛された思い出がないからだと彼女は言った。僕のせいではない、とも…。

ミナ　私は受け入れられない。わかることは出来ても、愛せない。

男　それは、彼女が自分自身を守るための言葉だった。

ミナ　きっと、これから出会うのよ。お互いに、いい出会いが待っているはず。だから、もう…。

男　何でそんなにも必死に言葉を選んで話すんだ！僕のこと「愛している」って言ったじゃないか？新しい年を迎えたら、新しい暮らしを始めようと、言ったじゃないか！僕が君を愛していない？僕は君を愛している！僕は愛が何を知っているんだ。だから、僕は全てを君に求めなかっただろ？全てをさらけ出し、開きなろうともしなかった。僕は愛が何を知っているんだ。だから、肌には触れても、心には触れなかっただろ？僕は知っているんだから。僕は君を愛しているんだから。

ミナ　さよなら。

男、ビデオを再生する。

男　あの日言ったように君は出会ったのかい？愛を共有できる人と。あの日から僕はずっとずっと考えているよ。そばにいた時よりもずっとずっと君を考えている。とても、苦しい。とても痛い。だから、僕は探したんだ。便利な世の中だね、なんでもお金で片付くんだから。

ミナ、苦しみだす。その吐き出すような息がまるであえぎ声のように聞こえる。

男　始めは耐えられない時だけ使ったんだ。それがただの紛らわしだと分かっていた。でも、やがて痛みは快楽に変わってゆく、その一瞬に取りつかれ、僕は落ちて行った。君の言うとおり、誰も愛せない男。それになってしまうとわかっていたけど…でも、わかってほしい…ううん、知ってほしい。僕が君の代わりにミナを選んだのは、絶頂を迎える瞬間の顔が似ているからじゃな

く、君と同じように寂しい光をその瞳の奥に持っていたからなんだ。

男、静かにリモコンを押す。

男　ただいま。

男、穏やかな顔で画面を見つめる。

ミナ　これしか残されていなかった。なんて、きっと嘘。それしか思い当たらなかった、それがホント。結局、選んでここへ来たのかもしれない。全てを隠して、それでいて存在を許される。誰かに、欲望のままに求められる。その限られた時間の中で、世界は私を中心に回る。全ての雑音、全ての哀しみが消える。そう、もしかしたら、私はここを求めてきたのかもしれない。決して自慢できる場所じゃないけれど、私は選んできたのだろう…そう思っていないと、私が可哀そうだ。

ミナ、男の隣に座り、テレビを見つめる。

ミナ　ねぇ、私のこと愛してる？

男　もちろん。

ミナ　本当に？

男　もちろん。

ミナ　私が「殺して」ってお願いしたら、そうしてくれる？

男　もちろん。

ミナ　ありがと。

ミナ、男の肩に持たれる。

男　君とこうしていると、生きているという感覚がよくわかる。

ミナ　私もよくわかる。

男　歳月を積み重ね、築きあげたものが、少しづつ壊れるてゆくのを感じる。

ミナ　痛い？

男　わからない。ただ感じるんだ。生きているって。

ミナ　私も感じる。壊れてゆくこと、生きていること。

男　ねぇ、時には僕が上になるっているのはどう？

ミナ　どうしたの急に？

男　たまには、ね。いいだろ？

ミナ　どうだろう？

男　怖がることはないよ。もう、僕たちは戻れないのだから。
ミナ　…。
男　戻れないんだよ。
ミナ　…。
男　戻りたいね。
ミナ　（静かにうなづく）
男　（リモコンを持ち）これを押せば僕は戻れるの？この箱を壊せばいいの？
ミナ　私は？私はどうしたらいい？まだ失っていないモノがあるのなら、教えて。
男　僕は全てが作り物であることを知っていた。そのはず。歪んだ顔も、高鳴る声も、潤んだ瞳も、作りものだと。知っていたはず。
ミナ　そう。作りもの。
男　でも、なぜだ。なぜ、ボタンを押しても君が消えない。
ミナ　なんで消してくれないの？
男　なんで消えないんだ！
ミナ　なんで消してくれないのよ！

沈黙が二人を包む。

男がリモコンを押す。ミナの動きが止まる。

男、食事を用意して、再びリモコンを…。

ミナ　「夢？いっぱい、いっぱいの人にミナのこと見て欲しいし、ミナもいっぱい、いっぱいの人、癒してあげたい。だからもっといっぱい、いっぱいお仕事して、いっぱい、いっぱい…いっぱい、いっぱい…ミナも癒されたい」

～暗転～

サチがソファーに座っている。マコト、食事を運びカーテンを開けようとする。それをサチが制す。

サチ　止めて！
マコト　でも体によくない。
サチ　疲れてる。そのままにしておいて。
マコト　でもね…。

サチ　あなたも同じなの？そうなの？

マコト　…。

サチ　よほどそこから見える景色の方が体に悪い。耳障りだけはいい着飾った言葉。偽善と言う張りぼての街並み。アイツが嫌った世界。私が憎んだ世界。

マコト　…。

サチ　私はどこに帰ればいいの？

マコト、そっとミナに近づき肩を抱く。

マコト　疲れているのでしょ？

サチ、マコトを睨みつける。マコト、視線を外し、離れる。

サチ　あなたは自分が正気であると、言い切れる？あなたには私はどう映っているの？痩せている？太っている？美しい？醜い？幸せそう？不幸そう？

マコト　疲れているのでしょ？

サチ　どうなんだろう？

マコト　急ぐことはないよ。ゆっくりでいい。

去ろうとするマコト。それをサチが制す。

サチ　子供の頃、作った覚えがあるの。さっき思い出したのよ。どうしてかしら、突然思い出したの。大したことでもないに…でも、覚えていた。段ボールと色画用紙で四角い乗り物を作ったこと。あれは車じゃなかったの。本当はタイムマシーン。でも、やり直したい過去も、逃げて行きたい未来もなかったから、誰にも言えなかった。ねぇ、なぜ私は作ったの？

マコト　本当にタイムマシーンだったの？

サチ　タイムマシーンを作ったのよ。

マコト　やり直したい過去も、逃げて行きたい未来もなかったのに？

サチ　なかった。だけど、あれは確かに…。

マコト　誰にも言えなかったのに？

サチ　どこにも当てがなった…今と同じ。あの頃のまま。

マコト　今はやり直したい過去も、逃げて生きたい未来も持っているでしょ？

サチ　（首を振る）例えそうだとしても、あれはただの作り物。本物ではなかった。

明かりが不規則に揺れ、ノイズが響く。

それらが止むと、サチがソファーに座り、その脇にマコトが立って

いる。

マコト　サチ？

サチ　…。

マコト　サチ？

サチ　…。

マコト　サチ！

マコト、テレビを切りサチを睨むように見つめる。

マコト　時間だよ。

サチ　（ピサを手に取り）タバスコを始めて輸入したのってアントニオ猪木って、知ってた？

マコト　行かなくていいの？

サチ　当時は全然売れなかったって、知ってた？

マコト　待ってるよ。

サチ　彼が販売権を手放したらブレイクしたって、知ってた？

マコト　最後なんだよ。

サチ　イタリアじゃタバスコじゃなくて唐辛子をかけるって、知ってた？

マコト　サチが見送ってあげないと。

サチ　ピサって聞いて日本人が思い描くそれは、アメリカンスタイルって、知ってた？

マコト　気持ちわかるけど、受け止めないと。

サチ　アメリカっていつもそう。豚肉で作るハンブルグステーキがアメリカにわたって牛肉に姿を変えて、挙句の果てにパンに挟まれて、世界を征服。見てみろよ、窓の外。アメリカンナイズされたその景色。いっそのこと、あの日に51番目の州になってしまえばよかったんだよ。そうなっていれば、いい年して駅前留学を余儀なくされるサラリーマンの苦労も、カッコだけで意味のわからない横文字を並べた歌も、それを聴かされて自国の文化の空っぽさに凹むこともなかった。

マコト　サチ？

サチ　俺もお前もアメリカ人だったのにな。そうすれば、もっと自由に歩けたかもしれないのにな。

サチ、テレビをつける。「馬鹿笑い」が聞こえてくる。

マコト　アメリカって本当に自由？

サチ　（かすかな声で）行かない。

マコト　えっ？

サチ　私、行かないから。マコト、行っていいよ。

マコト　…ダメ。

サチ　どうして？

マコト　最後のお別れなんだよ。アイツのこと慕っていた…愛していた人たちがお別れをするのよ。サチ、いないといけないよ。サチが一番…。

サチ　違うよ。おとといの夜、アイツの死んだ日、死んだ時。私はテレビを見てた。アイツの嫌いな歌番組を、シーツにくるまって、名字を知らない男とアイツと昔よく行ったホテルでね。

マコト　ウソ…。

サチ、マコトに何かを投げつける。マコト、それを拾う。それはラブホテルのライター。

サチ　マコト。彼と上手くいってないんでしょ？今度それをさりげなく使ってみたら？男の嫉妬って、可愛いよ。

マコト　…。

サチ　真面目で、従順。賢い犬コロみたいなマコトのそのイメージ悪くないけど、飽きられちゃうよ。

マコト　刺激を与えるため？

サチ　私は違う。恋愛なんて、始まりのその瞬間がピークで後は下がるだけ。私とアイツは…自分で言うのも笑えるけど…かなり激しかったじゃない？だから、下る勢いもあって、惰性の転がりも長くてね。ここまでコロコロ、コロコロ…って。

マコト　でも、最後なんだよ。

サチ　…いいなじゃない。私が行かないと始まらないわけじゃないし。

マコト　…。

サチ　死んだらそれで終わり。別れも何も…もう終わってるじゃない。

マコト、サチの手を掴む。鋭い視線だ。

サチ　ウザイな。

マコト、サチの手を引っ張り上げる。サチ、力なく立ち上がる。

サチ　説明的に飛び出す字幕。ウザイ。「はい、ここ笑うとこ」って、ＡＤの合図みたいでさ。俺たちサクラなのかよ。ウザイよ。そう思いながらも、気がつけば字幕追ってる俺、ウザイよ。笑ってる俺、ウザイよ。一緒に笑っているお前、ウザイよ。

マコト、サチを連れていく。

サチ　ウザイよね。

サチ、消える。

マコト　勝手に死んだアンタも、ウザイんだよ。

マコト、ソファーに座りピザを食べる。

マコト　何もできないくせに理論ばかりぶちまける奴、正義の仮面をかぶるただのおせっかいな奴。美しいものしか信じず真実を見ない奴、カッコだけつけていざとなれば逃げる奴、みんなの為と言いながら所詮は自分しか見れない奴…まっすぐに純粋に愛しすぎるアンタ。ウザイんだよ！

マコトの携帯がある。

マコト　ただ今壊れ続けています。ピーっという発信音が鳴りましたら…私をあなたの記憶から消して下さい。

発信音が響き、全てが闇に包まれる。

ＦＩＮ

無断使用・転用禁止